

# 給与飼料の選択による放牧養豚での経営改革

内村 利美

(農学部附属農場)

## 目 的

平成13年度は、単味飼料（圧ペン大麦，圧ペントウモロコシ，フスマペレット），平成14年度は，豚肥育飼料（JメントB）を給与し，牛が採食しないチカラシバが植生している場所を利用し，豚の放牧を行った。又，放牧開始時体重，出荷時体重，出荷日数，DG，採食量，飼料効率および単位増体当たりの飼料価格について調査し，年度で比較した。

また，豚放牧肥育後の跡地についても検討し，今後の経営に役立てる基礎資料を得ることとした。

## 材料と方法

白豚（L. W. D）100頭を平成13年6月21日と同年7月13日に50頭ずつと平成14年9月2日に50頭を放牧した。面積は2ha，1haとした。放牧時の平均体重は，39.5kg，46.1kgであった。

給飼施設は，両年とも5tタンク2基を用い，単味飼料，豚肥育飼料をそれぞれタンク内から流下式で採食出来る様にした。（写真1，2）

放牧地内は，牛用の電気放柵器を下線の高さを20cm，上線の高さを40cmで柵とし，豚が採食し脱柵のない様にした（写真3，4）。

飲水は給水器を用い自由飲水とした。避難場所として，長さ15m，幅5mのコンテナを設置し，内部にはシラスと土着菌で発酵させたノコクズを用いた。

山林は，庇陰林として利用した。

なお，調査頭数は，平成13年度を86頭，平成14年度を32頭とした。

## 結果と考察

放牧養豚でも飼料を選択することにより肥育期間が短縮された。牛の採食しない草も完全に除去され，草地の改良が行える様になった。

出荷までの日数を短縮出来た事で給与飼料の節約が出来た。

以上のことから飼料を選択し放牧肥育したことによって13年度と比較し，出荷日数，日平均増体重（DG）でも有意な結果がみられた（表1）。

出荷サイクルが大きく改善され，より多くの頭数が出荷可能となり，飼料コストを軽減させることによって経営改善に有意な結果をもたらすことが期待される。

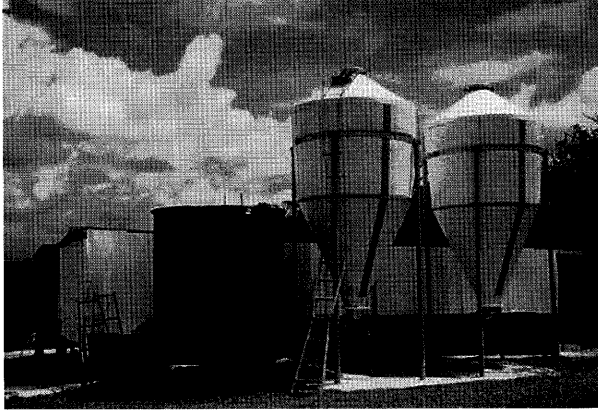


写真1. 給餌施設の外観

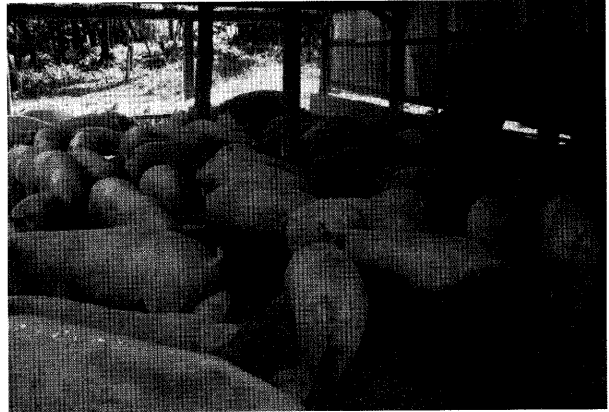


写真2. 給餌風景



写真3. 放牧風景



写真4. 牧草採食風景

表1. 飼料選択による飼料効率および単位増体重当たりの飼料価格の差異

	入荷体重	出荷体重	増加体重	出荷日数	日平均体重増加量	採食量	飼料効率	単位増当たりの飼料価格
平成13年度	39.5	115.9	76.9	264	0.29	607.2	0.13	242.3
平成14年度	46.1	116.2	70.1	117	0.60	364.1	0.19	133.3